

令和4年度 校内研究計画

新潟市立岡方第一小学校
研究推進部

<研究主題>

考えを広げ深める子どもの育成 ～対話的な学びを通して～

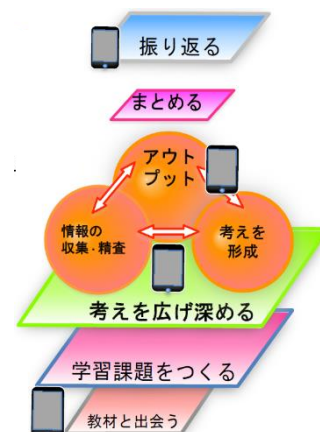
1 研究主題設定の理由

(1) 社会的な背景

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、社会構造や雇用環境は大きく変化する時代を迎えている。今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちは、このような予測が困難な時代を生きていくこととなり、そこには、目の前の事象から解決すべき課題を見出し、主体的に考え、多様な立場の者と協働的に議論しながら納得解を生み出す力が求められる。

学校教育においては、一人一人の児童が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。平成28年中教審答申では、時代を切り拓く子どもたちに求められる資質・能力として、文章の意味を正確に理解する読解力、教科等固有の見方・考え方を働かせて自分の頭で考えて表現する力、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し新しい解や納得解を生み出す力などが挙げられた。さらに、令和3年中教審答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図ることが重要であるとされた。

新潟市においては、目指す子どもの姿の一つとして「自ら課題をつくり、その解決に向けて協働的・対話的に考えを広げ深めていく子ども」が挙げられ、課題解決に向けて「考えを広げ深める」授業スタイルが示された。ここでは、子どもが獲得した知識や学び方をアウトプットし合い、思考を広げ深めていくことが求められている。



(2) 当校の児童の実態

当校の児童の授業におけるつまづきから、次のような課題が挙げられる。

- 既習事項が定着していない
→ 授業や単元の中で何を学んだのかが曖昧なままになっている。
- 学んだ知識・技能を活用することができない
→ 1つの学びで完結してしまい、既習事項を繋げて解を見出すことができない。
授業や単元のポイントを自分なりの言葉で言語化させ、定着を図る必要がある。
- 考えを発信する力が低い
→ 語彙力の乏しさや論理的説明力の低さから、学びが深まらない。
各教科で重要となる用語やその使い方など、表現の仕方を指導していく必要がある。

以上の課題を解決するためには、各授業の思考場面において、既有知識と新しい知識とを結び付けて考え、自分の考えを言葉で表現する力、さらに、アウトプットされた考えを児童同士で交流し合う中で新たな考えを形成していく力を育てて、学びの定着を図る必要がある。

また、当校の特徴として、人間関係が良好で、互いに認め合う雰囲気があるがどの学級にも見られることが挙げられる。しかし一方で、どんな意見に対しても「よいです」と言って聞き流してしまい、本当に自分が「よい」と思う意見なのか、もっと付け足すべきことはないかなど、深く考えずに人の意見を聞いてしまい批判的思考をもつに至らないという現状がある。ただ意見を表面的に発表し合って終わるのではなく、互いに忌憚ない意見を出し合い、それをさらに高次なものへと練り上げていく対話的な学習活動を計画する必要がある。

《目指す児童の姿》

自分の考えを言語化できる子(step1・低学年)

自分の考えと比べながら友達の考えを聞くことができる子(step2・中学年)

対話を通して自分の考えを広げ深めることができる子(step3・高学年)

2 研究の内容

目指す児童の姿を実現するために、『岡一授業スタンダード』(下記 a～e の 5 つを意識した授業スタイル)を設定し、どの場面でどのような手立てを講じるかを考えて授業を行う。また、授業を支える対話スキル(下記 f・g)は教科学習だけでなく、特別活動など学校生活の様々な場面において定着を図る。これらの育成に欠かせないのが、学級の支持的風土の醸成(下記の h)であることを全職員が共有する。

(a) 「問い」から生み出す学習課題

児童の高い学習意欲は、「問い」が生まれた瞬間に沸き起こる。そして対話を通して、「問い」を学習課題に発展させ、問題解決型の授業を構成することで、価値ある学習内容について主体的・協働的な学びを展開することができる。

優れた学習課題を設定するには、児童に思考のずれ・矛盾・驚きを生じさせる必要がある。そのためには、授業導入の仕掛けとして教材提示・問題提示の工夫が重要となる。児童が「今までのやり方だと解けない」「どうすれば解けるだろう」と考えるような提示の仕方を授業で実践していく。

優れた学習課題を設定・共有することで、児童が「じっくり考えたい」「友達と一緒に考えたい」という思いをもつことができ、課題を解決するために意欲的に自分で考えたり友達の考えを聞いたりすることができる。

(b) 教師の問い返し

授業において教師は、児童一人一人が、他の児童との対話や教師との対話を通して、自分と他者の考えを比較し、新しい気付きを得たり、考えを広げたり深めたりすることができるように働き掛ける必要がある。そのためには、教師の発問を吟味し、有効な問い掛けを行っていかなければならない。「児童の知的欲求を喚起する」、「新たな視点に気付かせる」、「既習事項を想起させる」「考えを揺さぶる」、「考えを深めさせる」など、児童のつぶやきを拾って問い返し、対話を活性化させていくことで、児童の思考を広げたり深めたりしていく。

(c) 学びの足跡の視覚化・蓄積

児童が学びを言語化する上で大きな手助けとなるのが、板書である。授業のねらいに迫るために必要となる考えやキーワードは、強調されるようなレイアウトにしたり色を変えて表したりして、学びの足跡を視覚化し、児童の思考の整理の手助けとなるようにする。学習のねらいに迫るために必要となる考えやキーワードは、授業一単位時間の中だけで登場するわけではない。単元の中で前時までに出示されたものについては、掲示などで視覚化し、単元を通して既習事項を活用できるようにしておくことも有効である。

大切なキーワードを授業の中で丁寧に抑えることで、児童が言葉を正確に理解し適切に使えるようになっていく。学習における語彙の習得を通して、考えを伝えるための表現力も伸ばしていきたい。

(d) 思考ツールの活用

授業の思考場面・考えの交流場面で、適切な思考ツールを活用することは、児童の思考を活性化し、学びを深めることに繋がる。思考ツールの種類としては、「ベン図」「X (Y) チャート」「ウェビング」「座標軸」など、様々なものが考えられ、学習の特質に応じた形式のものを用いることが大切である。思考ツールを用いて自分の考えを整理した後、友達同士でそれを見せ合いながら交流し、対話を通して学びを広げたり、深めたりしていく。

思考ツールの媒体としては、児童一人一人のタブレット端末やノートの他、大型ホワイトボードや模造紙などが考えられる。各学年の実態や学習の展開に応じて適切な媒体を選択する必要がある。

(e) 対話形態の工夫

対話の形態には、学級全体で話し合う以外にも、多様な形態が考えられる。「ペアトーク (2人で)」「グループトーク (3, 4人で)」「ワールドカフェ (グループメンバー入れ替え制)」などである。学級全体で話し合う場合でも、児童のつぶやきを繋ぎ合わせていく形式、挙手をした児童が発言する形式、教師が意図的に指名した児童が発言する形式、児童の相互指名形式など、様々な方法が考えられる。授業ごとの対話のねらいをよく吟味し、どのような形で話し合うことが効果的なのかを見極めることが大切である。

(f) 対話基礎スキル

児童同士の対話を活性化させるには、話合いの土台となる基礎スキルが必要である。無意識のまま使っている言葉にこそ意識を向けさせ、「なんとなく」ではなく「確かに」話したり聞いたりすることができるようにならせていく。

	表出される言葉の例	
話すスキル	考えを述べる	～だと思う。～だと考える。理由は～だから。
	意見を繋げる	〇〇と結び付けて考えると…。〇〇と比べると…。
	接続詞	まず。次に。そして。また。だから。けれども。
聞くスキル	あいづち	はい。うんうん。なるほど。分かる。そうなんだ。
	質問	～というところ？どんな感じ？もう少し詳しく！具体的には？他には？
	自分と比較	わたしもそう思う。でも、わたしは～と思う。

教科学習だけでなく、特別活動など学校生活の様々な場面において、これらの言葉を意識的に使わせ、スキルの定着を図る。

(g) 話す・聞くトレーニング

対話に欠かせない「話す力」「聞く力」は、授業内だけで磨かれるものではない。生活の様々な場面で

人と関わることを通して磨かれ、対話力の土台が出来上がっていくものである。この「話す力」「聞く力」を伸ばすために、日常的にトレーニングを取り入れる。それは、話したり聞いたりすることを苦手としている児童でも楽しく抵抗なく取り組めるように、短時間のゲーム方式で行う。朝の会や帰りの会、隙間の時間等の数分を利用して、毎日少しずつトレーニングを積み重ねていく。

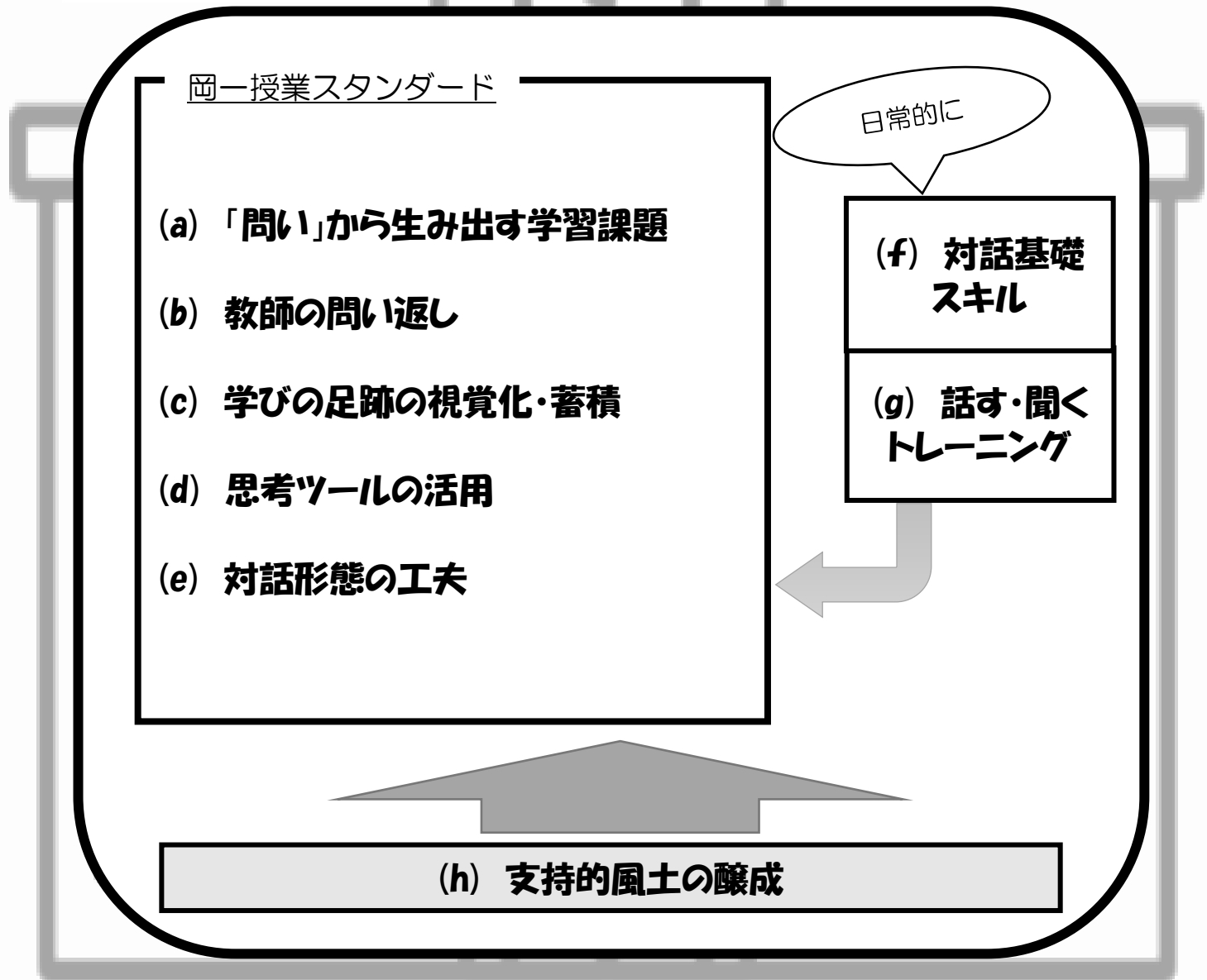
トレーニングの例
<ul style="list-style-type: none">○ 朝の会の呼名で、返事と一言付け足し○ 誰かが言った言葉をすべて繰り返して言うオウムゲーム○ しりとり遊び○ 隣の席の友達にインタビューゲーム○ 「これは何でしょう？」質問クイズ

(h) 支持的風土の醸成

児童が自由に発言し合い、話し合い、活発な対話ができるようにするためには、日頃の「何でも話せる」雰囲気づくりが大切である。自分の考えを聞いてもらえるという安心感と発言したくなるような空気分、さらには批判的意見を言っても互いに受け入れられるという信頼関係があってこそ、本当の意味での対話が成立する。様々な場面で、児童同士が一人一人の意見を大切にしたり互いのよさを認め合ったりすることができるよう継続的に指導していく。

《研究主題》
考えを広げ深める子どもの育成
～対話的な学びを通して～

岡一の教育活動



自分の考えを言語化できる子 (step1・低学年)
自分の考えと比べながら友達のことを聞くことができる子(step2・中学年)
対話を通して自分の考えを広げ深めることができる子(step3・高学年)

4 研究の進め方

(1) 授業研究について

各担任と級外は、研究教科を1つに絞り、1年間を通して研究に取り組む。教科は、国語・社会・算数・理科のいずれかとする。学習指導案^(※)を作成しての授業公開は、以下のとおりとする。

	大研	中研	小研
教科等	国語・社会・算数・理科		
授業者	研究主任と学年担任1人	大研授業者以外の学年担任	かがやき担任・教務
時期	6～12月	6～12月	6～12月
指導案検討	全員	学年部と管理職1名	
指導案	細案 A4 4ページ	略案 (A4 表裏1ページにおさめる)	
授業参観と協議会	全員	全員	学年部, 管理職, 研究主任, 希望者
指導者	外部講師または指導主事	校長	

※ 略案は、起案→検討会→配付とする。略案は授業の1週間前に起案する。

※ 細案は、起案→検討会→再起案→配付とする。細案は授業の2週間前に起案する。

(2) 授業研究の流れ

5月末頃まで	個人研究計画作成 ○ 研究教科についての個人研究計画を入力する。 入力お願いします>R4個人研究計画	一年間を通して全教科で対話的な学びを取り入れる。
6月初旬	授業日・個人研究計画配付 (データ上でシェア)	
7月	「ロイロ de 研究成果シェア」開始 ○ 各月の研究成果(板書写真・授業部分動画・思考ツール・児童のノート等)を、月末までにロイロノートで提出する。(後述)	
研究授業1週間前 (大研は2週間前)	授業計画 ○ 学習指導案の検討会を行う。 ○ 検討会では必ず管理職から指導・助言を受ける。	
研究授業2日前まで	授業計画提示 ○ 職員全員に学習指導案を配付する。	
研究授業当日	研究授業 ○ 写真係が、授業の様子や板書を写真に撮る。 協議会 ○ 4, 5人グループでのファシリテーション形式で行う。授業を見る視点(授業者が事前に提示)に沿って話し合い、記録係がデータ入力をする。	
研究授業後	協議内容共有 ○ 研究主任が研推だよりを発行し、各グループの協議内容を共有する。	
2月	研究のまとめ ○ 研究全体会で、研究の成果と課題を明確にし、次年度の研究について話し合う。	

5 その他の取組

(1) 「問題」「課題」「まとめ」「振り返り」のプレートを活用した授業の実施

(2) ノート指導

- | | |
|-------------------|------------------|
| ① 日付を書く。 | ② 「課題」を書き、赤で囲む。 |
| ③ 自分の考えや友達のことを書く。 | ④ 「まとめ」を書き、青で囲む。 |
| ⑤ 「振り返り」を書き、緑で囲む。 | |

※ 下敷き・ミニ定規を使う。 ※ 行・マスを開けて、見やすく書く。

※ 原則、毎時間、新しいページから書く。

(3) ノートの達人コーナー

- 児童玄関前の掲示板を「ノートの達人コーナー」とし、各学年で授業において自分の考えをしっかりと言語化できているノートや工夫して取り組んだ自主学習ノートを掲示する。月初めに更新する。

(4) 家庭学習習慣の確立

「新潟市の家庭学習」を基に、授業と連動した家庭学習を進める。

- 低学年 20 分以上 中学年 40 分以上 高学年 60 分以上 を家庭学習時間の目安とする。
- 市教委配付の「家庭学習のススメ」などを活用し、保護者への啓発を図る。
- 家庭学習強調週間の実施(5月・9月・11月・2月)年4回

(5) 学力アップタイムについて

- 1 月から数回、3 年～6 年を対象に学力アップ教室を実施する。

(6) NRT・全国学力調査の分析

- 児童の実態を把握し、授業の改善に役立てるため、上記の学力検査を分析し、共通理解を図る。

(7) プリントボックスの活用

- 各学級にあるプリントボックスを活用する。授業でやることが終わってしまった場合は、読書だけでなく、このボックスのプリントに取り組めるようにする。